

中大の伝統について 考えたことはありますか？



学長
角田 邦重
すみだ くにしげ

中大を旅立つ諸君に、心からお祝いを申し上げます。卒業おめでとう。

大学でどんなことを学びましたか、新たな自己発見がありましたか、これからも生涯にわたって付き合っていくけそうな友人と巡り合うことができましたか？そしてこれらを経験するなかで中大らしさを感じ、いつの間にか自分もその個性に染まっているかも知れないと思ったことはありませんか。

色々なところで、大学生の学力低下やアルバイトと遊びに精を出しているながら何となく卒業してしまう最

近の大学生といった学生のイメージ

が流布されていますが、大学が専門知について学ぶ場であることが強調されなければならぬのは当然です。もちろん大学で学んだ知識が、社会ですぐに役立つ専門性を備えているなどと考えているわけではありませぬし、情報を始めとする科学技術の発展と、その結果、あるいは原因でもある急激な社会変化を経験しつつある今日、大学で学ぶ知識の専門性には限界があるし、また専門領域の具体的知識ほど陳腐化のスピードも速いと言わねばなりません。だからこ

そ、社会に出るから、それぞれの職業領域での継続的専門教育の必要性が強調されているのです。大学で学ぶことは専門的基礎知識であり、その過程で、何故そうなっているのかを問う能力を身につけ、さらに専門領域で生じている変化や発展の方向を追っかける、いわば学び方の方法論にあると言っても良いでしょう。

新たな自己発見といっても、何も自己についての哲学的問いを発したことがあるか、などと言っているわけではありません。就職活動の過程で、諸君は多かれ少なかれ自分ほんんな職業に向いているのか、何をやりたいのかと自問したに違いありません。企業に気に入られそうな模範回答を用意しておけばよいといった安直な傾向と対策で切りぬけられるほど、就職の選抜は楽ではなかったはず。就職活動の経験が、諸君を一回りも二回りも人間的に大きくすることを、われわれは良く知って

います。そういった経験を含めて、自分や他者の生き方を考えた者ほど、それが職業生活のなかでの新たなアイデアの発見や忙しさにまぎれて忘れてしまいがちな職業人としての矜持の維持といった人間的力を身につけることに繋がるはず。さて、これらを身につけることになる4年間の大学生活（あるいは5年、6年といった学生生活を送った人がいるかも知れませんが）、少しもおかしくないことではないのですが）

で、自覚するとしなやかにかかわらず、諸君は、中大らしい専門的知性や学び方、あるいは生き方を身につけたと思いますか。もしそうだとしたら、それが伝統の力だと思おうのです。諸君は、1885（明治18）年に英吉利法律学校として出発した中央大学の建学の精神が「イギリス法の理念である個人の自由の尊重と実証的・合理主義の学風」、「質実・剛健と家族的情味の校風」にあると

いった話を一度は聞いたことがあるはずですが。

私はつい最近、定年で大学をお辞めになった先生（佐藤進名誉教授）から、中大の建学の精神について教えてもらう機会を得ました。中大の

創設者で初代校長を務めた増島六一郎は、イギリスのミドル・テンプルという法曹学院に学びバリストという法廷弁護士資格を得て帰国した若い法律家でした。彼の抱いた理念は、留学当時イギリスで展開されていた大学教育を経済的力をもつに至った市民階級に開放する運動に共鳴し、大学教育を広く国民の手に開放し質素で誠実、強い意志力と健康

（質実剛健）に裏付けられた国民の教育こそ本当の国の力だというものではなかったか、中央大学という校名もミドル・テンプルのミドルからきたのではと推測されています。考えてみると、中大の創設者は、慶応の福沢諭吉や早稲田の大隈重信と

いったスターではなく、いずれも30歳前後の18人の若い法律家たちです。現代風に言えば、理想と冒険心に溢れたカンパニーの精神によるものと言って良いでしょう。

このような伝統は、華やかさを追うよりも実学を重んずる中大らしさ、虚勢を張るよりも堅実さを選択する、見ていて少し歯がゆいくらいの中大生の気質として今でも生きていると思えませんか。

この文章を書いた日、びわ湖毎日マラソンの実況放送で、わが大学の藤原正和選手が3位、日本人として1位、しかも初マラソン日本最高の記録で小さく親指を立てながらゴールに飛び込む勇姿を見て興奮しました。インタビュに冷静で分析的にしかしキツパリとビジョンを語る彼の姿に、これぞ中大の伝統の真髄だと思いましたが、諸君はどう感じましたか。

